



図4 発掘調査地位置図



図5 天野山境内図(天野山金剛寺所蔵)

天野山金剛寺遺跡 2025 年度発掘調査

立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻

はじめに

立命館大学考古学・文化遺産専攻では、南河内地域の中世の実態解明のため、今年度より河内長野市教育委員会との共同調査により、大阪府河内長野市天野町の天野山金剛寺遺跡の調査を実施しております。金剛寺旧境内子院と推定される場所の遺構の有無や残存状況、時代相を確認するため、8月26日より発掘調査を開始しました。本資料では、その調査状況を速報的に公開します。

遺跡の歴史

【奈良時代】 行基が天野山金剛寺を創建しました。

【平安時代】 荒廃していた金剛寺を阿観上人が再興し、その後、皇族の八条女院の熱い庇護を受け、最盛期を迎えました。

【南北朝時代】 金剛寺は南朝の拠点となり、天皇が仮の御所「行宮」として政治を執り行いました。天皇が去った後に二度の焼き打ちを受けることになります。南北朝時代の動乱後、徐々に衰退し、子院が減少していきました。

【江戸時代】 豊臣秀頼に再興され、絵図の景観通り、南北方向に子院が立ち並ぶようになりました。

既往の主な調査成果

1938 年度調査 多宝塔基壇中より梵書された鎮石を含む、鎮壇遺構が検出されました。

1991 年 KGT91-1 天野川右岸の楼門前で焼土層が検出されました。

1973 年 KGT97-3 天野山谷部入口で中世から続く子院跡とみられる遺構が検出されました。18 世紀から 19 世紀に区画整理で墓域が変化した様相が明らかになりました。

1995 年 KGT95-1 南門以南で連続する焼土層を検出しました。焼土層上に 15 世紀中頃に比定される礎石建物が、焼土層下に 14 世紀初めから中頃に比定される遺構面を 2 層検出しました。

1998 年 KGT98-1 吉祥院東方で子院跡の遺構が検出されました。中世の瓦質仏具や排水路とみられる遺構が検出されました。

2006 年度～
2007 年度調査 開山堂の保存修理工事に伴う調査で、高麗青磁水注と瓦質挿鉢をかぶせて人骨を埋納する常滑甕などが整地層下にて見つかりました。

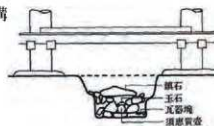


図1 1938 年調査
多宝塔基壇内鎮壇遺構



図2 KGT98-1 検出遺構

検出遺構

溝状遺構 1



集石遺構



溝状遺構 2



落ち込み遺構



焼土層

天野山金剛寺では延元 2 (1337) 年と正平 15 (1360) 年の 2 度の戦火に遭っており、発掘調査成果でも広い範囲で焼土が検出されています。しかし、中心伽藍とその周辺では焼土が検出されておらず、火災を免れたとされています。本調査地は境内に近い場所に位置しますが、焼土が検出されませんでした。したがって、この成果を追従する結果となりました。

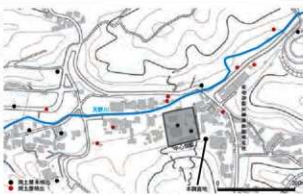


図 3 焼土層検出位置図

出土遺物

土師器

本調査では京都産土師器の形態の模倣した京都系土師器と南河内地域で一般的に見られる在地系土師器が出土しました。



京都系土師器



在地系土師器



瓦器碗

瓦器碗

13 世紀後半のものと考えられる瓦器碗が出土しました。

陶磁器類

本調査地からは愛知県で生産された常滑焼や瀬戸焼、岡山県で生産された備前焼、中国で生産された磁器類が出土しました。そのため、天野山金剛寺では様々な地から陶磁器が流通する一大消費地であった様相が明らかとなりました。



備前焼



常滑焼



青磁

まとめ

本調査で検出された遺構の形態や出土した遺物の年代より、本調査地では鎌倉時代から南北朝時代の遺構が存在することが明らかになりました。また、火災に伴う焼土が検出されなかった点や、近世の遺構が認められない点、近世金剛寺の絵図から、室町時代の戦火に遭わず、近世以降、長らく放置されていたと考えられます。詳細については、さらに今後の調査で明らかにしていく予定です。